

「いくつしみとあわれみの神」

－ヨナ書におけるヤハウエの描かれ方－

水野 隆一

はじめに

ヴァイザーは、ヨナ書について、「どこからどこまでも神中心の特徴を持っている」と述べている(456)。確かに、書名となっているヨナの行動は記されるが、それよりも劇的で、重要な意味を持つのはヤハウエ¹の行動であり、この書を締めくくるのはヤハウエの発言である。そして、この神は異邦人の祈りを聴き、その悔い改めを受け入れる神として描かれ、それゆえに、ヨナ書は、ヘブライ語聖書において普遍主義的な特徴を持つものとして広く認められている²。

では、ヤハウエに注目すると、この物語はどのようなものとして読み得るのだろうか。本論文は、文芸批評的な視点からヤハウエというキャラクターの描かれ方を分析して、ヘブライ語聖書におけるその特徴を明らかにしようとするものである。

1 悪

物語は、ヤハウエがニネベの「悪」(רָעָה)を認識するところから始まる。ニネベに対する預言をヨナに命じた理由が、「彼らの悪が私(論者注：ヤハウエ)の前に上ってきたからだ³」というものである(1:2)。しかし、その具体的な内容については、ヤハウエは何も言わない。何を悪と認識したのか語られておらず、読者は理解することができない。

一方、ニネベの人々は「自分たちの悪い道から立ち帰るように」呼びかけられた際に(3:8)悔い改めの行為をし、ヤハウエもこの行為を認定した(3:10)。ここで「悪」は形容詞として用いられているが、物語のはじめにヤハウエが認識したように、ニネベの人々も自分たちの「悪」を認めたことになる。ただし、具体的には彼らのし

1 神名の使用については、Sasson: 18 参照。3、4 章では אֱלֹהִים が用いられているが、全体として神的存在はヤハウエと考えて差し支えないだろう。3 章における神名の用法については、後に論じる。

2 例えば、ヴァイザー: 433、Wloff: 85-6。Sasson はこれに反対する議論を展開している(25)。

3 とくに断りのない場合、聖書本文の訳は論者によるものである。

たことは外形的な悔い改めの儀式的行為であって（5、6、7～8節⁴）、自分たちがどのような「悪」を行ってきたかを認識して、どのようにそこから転換したのかは明らかではない⁵。

しかも、彼らが「信じた」（5節）のは一般的な **אֱלֹהִים** であるし⁶、王の布告においても、8節では一般的に「神に呼びかける」ことが求められていた。この物語において審判を下す主体であるヤハウエを認識したわけではないし、そのことは、ヤハウエの認識した「悪」が彼らに共有されていたわけではないことを表している。

それにもかかわらず、ヤハウエ⁷は「悪を思い直した⁸ (**וַיִּנְחַם הָאֱלֹהִים עַל-הָרָעָה**)」（3:10）。これは、ヤハウエの「悪」認識が曖昧であったため、曖昧な「悔い改め」を受け入れることができたからだと思われる。

興味深いのは、ニネベに下されることになっていた審判が「悪」と表現されていることである。これは審判を受け、滅ぼされる側の認識であり、「悪」に対する審判は「正義」であるという、ヤハウエ側の認識で記されたものではない。ニネベの「悪」をヤハウエが認識して物語が始まったが、ヤハウエがニネベに対する「悪」を思い止まって物語が終わるといふ、レトリックが成立している。

ところが、ヨナは、ヤハウエが「悪を思い直した」ことを、「大きな悪」として受け止める（4:1. **וַיִּרַע אֱלֹהֵינוּהָ רָעָה גְדוֹלָה**）。ここでは、**רָעָה** がその同根の動詞 **רָעַע** の目的語として用いられており、ヨナにとっての「悪」が強調されている。ヤハウエがニネベの「悪」を認識したのよりも厳しい表現で、ヤハウエが「悪を思い直した」ことの「悪」が語られている。

4 「断食」「粗布をまとう」「灰の上に座す」などは、ヘブライ語聖書における「悔い改め」の儀式として、一般的に認識されている（Simon: 30, Wolff: 151。その外形的な意味については、Zlotowitz: 124n.1 参照）。しかし、「断食」と「粗布をまとう」が同時に用いられるのは、他には5箇所（イザ 58:5、詩 35:13、エス 4:3、ダニ 9:3、ネヘ 9:1）だけであり、「粗布をまとう」と「灰の上に座す」が同時に用いられるのは他には5箇所（イザ 58:5、エレ 6:26、エス 4:1、3、ダニ 9:3）だけ、従って、この3つが同時に言及されるのは、他にイザ 58:5、エス 4:3、ダニ 9:3 の3箇所だけである。

5 8節には「悪い道」と並んで **חָקֵס** 「暴虐」への言及があるので、権利の侵害があったのかもしれない、ニネベの人たちがそれを認識していたかもしれない（Zlotowitz: 130 参照）。船、嵐、「暴虐」、鳩（ヨナ）、滅亡など、ヨナ物語と洪水物語には共通点が多い。**חָקֵס** は創 6:11、13 に用いられているが、洪水物語においても洪水の原因となった人間の「悪」については具体的な言及がないことから、ヨナ物語においても一般的な「悪」理解がされているとも考えられる。

6 Zlotowitz は、船の乗員に比べてニネベの人々の「信仰」が不十分であると論じているが、それは、神名の違いにも大きく関係していると思われる（123）。一方、Wolff は、動詞 **אָמַן** と前置詞 **בְּ** によって表される信仰は、イスラエルとの関連でのみ言及されると主張する（150）。

7 10節でも「悪を思い直した」の主語としては **אֱלֹהִים** が定冠詞付きで用いられている。これは、9節の王の布告の中で定冠詞付きの **אֱלֹהִים** が用いられていることを受けて、その表現を繰り返したためであると思われる。9節で定冠詞が付されているのは、8節で救いを求めて祈った神が応じてくれると考えたためであろう。

8 Trible はその論考の中で、動詞 **נָחַם** に一貫して“repent”という訳語を当てている。それは、「考えを変えることはない」（サム上 15:29）と言われているヤハウエが、この神学的表明に反して、しばしば考えを変え、また、自分のしたこと「後悔」している記述があることを強調するためであると考えられる（204）。

怒るヨナに対して、ヤハウエはまず、問いかける。「あなたが怒っているのは、正しいことか (הֲיִטֵב תָּרָה לָךְ)」(4 節)。「正しいこと」を表すために、動詞 טִב のヒフィル語幹不定詞が副詞として用いられている。これはもちろん、動詞 רָע の反対語であり、רָע の反対語 טִב の語根でもある。つまり、ヨナが「悪」を感じて怒っていることの正当性を問うていることになる。

次にヤハウエは、ヨナを「自身の悪から救い出すために (לְהַצִּיל לּוֹ מִרָעוֹתָּו)」とうごまの木を生え出でさせる(6 節)。それを、ヨナは喜ぶ (יִנָּה עַל־הַקִּיקִיּוֹן שִׂמְחָה גְדוֹלָה) (וַיִּשְׂמַח)。この表現は、同族目的語を伴って強調されている(動詞 שִׂמַּח と目的語 שִׂמְחָה) が、それは、ヨナが感じた「悪」の表現と並行している。2つの文を並べるとはつきりする。

1 節 וַיִּרַע אֶל־יִנָּה רָעָה גְדוֹלָה

6 節 וַיִּשְׂמַח יִנָּה עַל־הַקִּיקִיּוֹן שִׂמְחָה גְדוֹלָה

6 節に記されている、極めて個人的で物質的な「喜び」という語によって、1 節の「悪」も個人的で感情的なものであったと感じさせられる。そして、ヨナが感じている「悪」から救い出すためにヤハウエがとうごまの木を生え出でさせたのは、的を射たやり方だったことが明らかとなる。

ヨナが乗り組んだ船に乗り合わせた人々は、自分たちの遭遇した自然災害を「悪」と認識している(1:7, 8)。彼らが遭遇した大風と荒天はヤハウエによるものだと、物語は語っている(1:4)。この物語において、ヤハウエが行うことは、その影響を受ける者にとっては「悪」なのだ。

この大風と荒天がヨナの「逃亡」と関係があるのかについては、曖昧な記述しかされていない。4 節は וַיְהִי הַטָּיִל רוּחַ־גְּדוֹלָה אֶל־הַיָּם と、主語の転換を強調する語法で始まっている。これは単に話題の転換を表すと考えれば、ヨナの「逃亡」との関連はなくなる。一方、3 節で、一連のヨナの行動——これは、2 節のヤハウエの言葉に対する、無言の、行為による応答である——が記された後を受けて、しかも、その記述は「ヤハウエ」という語で終わっているため、ヨナの行動への応答だと読むことも可能である。

船の乗員たちは、この「悪」には、何者かの関与があると考えている。くじを引くとヨナに当たり(7 節)、ヨナの手足を縛って海に投げ込むと海は静まったので(15 節)、読者は、ヨナの「逃亡」と大風・荒天の間に因果関係があると推測する。しかし、自分を海に投げ込めばいいというヨナの提案を聞いても、乗員たちはそれをすぐには実行に移さずに、さらに、自分たちの力で遭難を免れようと努力するし(13 節)、

「いくつしみとあわれみの神」

ヨナを投げ込む際にも、「無実の者の血（を流した罰）を私たちに下さないください (וְאַל-לְהַתִּיחַ עָלֵינוּ דָּם נָקִיא)」とヤハウェに向かって言う (14 節)。言い換えるなら、くじが当たって、結果が示されているにもかかわらず、彼らはそれを受け入れていないのである。

さらに、ヨナを海に投げ込んだとしても、それと海が静まったこととの関連は明らかではない。確かに、ヤハウェが罰しようとしていたヨナが罰せられたのでその怒りが静まったとも読めるが、荒ぶる「海と乾いた地を造った神」(9 節) が人身御供を受け入れたためとも読める。

乗員がヤハウェを「恐れた」(16 節) のは、ヤハウェが自分の民の 1 人をここまでして追究し、他の者を巻き添えにすることをいとわないことを目の当たりにしてなのかもしれない⁹。あるいは、人身御供という極端な犠牲を払わなければ鎮まらない神¹⁰を経験してなのかもしれない。いずれにせよ、そこには「畏怖」以上に「恐怖」が含まれていることだろう。

ここまで、「悪」をめぐる、ヤハウェとの関係を見てきたが、ヨナ物語においては、ヤハウェの認識した「悪」は曖昧なものであるのに対し、ヤハウェの下した「悪」、ないしは下そうとした「悪」は、それを受ける者にとっては具体的で、命の危険を伴うものであった。また、ヨナの感じた「悪」は、個人的な感情的なものに過ぎなかった。

2 あわれむ／あわれまない

物語を閉じるのは、ヤハウェとヨナの対話である (4 : 8 ~ 11)。最後は、ヤハウェのことばで結ばれている¹¹ (11 節)。

4 : 11 原文は次のようになっている。

וְאָנִי לֹא אֶחָדָם עַל-נִינְוָה הָעִיר הַגְּדוֹלָה

この文はほとんどの翻訳、注解書において修辞疑問として訳されている¹²が、問題

9 ヴァイザーがこのように理解している (441)。

10 Trible が同様の見方をしている (201)。

11 Fretheim は、最後に語るのはヤハウェであるが、このヤハウェの発言が「決定的なことば (the last word) ではない」としている (185)。一方、Price & Nida は、「答えは明らかに暗示されている」とする (46)。論者の意見は Fretheim に近いが、これについては、後で詳しく論じる。

12 例えば、新共同訳は次のように訳している。「それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。」英訳でも同様に、*Common English Bible* では、“Yet for my part, can't I pity Nineveh, that great city, . . . ?”となっている。

を難しくしているのは、疑問文を構成する文法的要素が欠けていることである。これについては、接続詞 ו が逆接で用いられている場合、修辞疑問は疑問詞を用いないことがあるとされる¹³。多くの翻訳・解釈はこの文法的な説明に従っていると考えられる。

この文を修辞疑問として解釈することを正当化するために、ヘブライ語聖書の他の箇所における、“qal wa-chomer” とラビ伝承で呼ばれる、同様の類比表現が引き合いに出される。Sasson は、創 44 : 8 とエゼ 15 : 1 ~ 6 を例に挙げ、その説明をしている¹⁴ (307-8)。その類比が用いる論法は、「人間である A が B するならば、神である A' はなおさら、B' するはずだ」とするものである。この論法に従えば、「ヨナがとうごまをあわれむのなら、ヤハウエはなおさら、ニネベをあわれむはずだ」ということになる。

このような対比が可能かどうか見るために、10 節と 11 節の関係を次のような対照表にまとめてみた¹⁵。

10 節	11 節
a. אַתָּה חֲסַתְּ עַל־הַקִּיקִיּוֹן あなたはとうごまの木をあわれんでいる	וְאֲנִי לֹא אַחֹס עַל־יַנְיָהּ הַעִיר הַגְּדוֹלָהּ 私は、大きな町ニネベをあわれまない (でいられようか)
b. אֲשֶׁר לֹא־עָמַלְתָּ בּוֹ וְלֹא גִדַּלְתּוֹ あなたはそのために労したことも、それを 育てたこともない	
c. שְׁבוּן־לַיְלָה הִיָּה וּבּוֹן־לַיְלָה אָבָד それは一夜にして生え、一夜にして滅んだ	
d.	אֲשֶׁר יֵשְׁבָה הַרְבֵּה מִשְׁתִּים־עֲשָׂרָה רְבוּ אָדָם אֲשֶׁר לֹא־יָדַע בֵּין־יָמֵינוּ לְשִׁמְאוֹ וּבְהֵמָה רֶבָה そこには 12 万人以上の人間がおり、 彼らは右と左の区別も付かず、 多くの家畜もいる

13 西村 : 132, Wolff : 161, Tucker : 103. GK § 150a 参照。

14 Tribble : 207 も参照。

15 同様の対照表は、Simon : 45 にもある (次の注 11 参照)。

Sasson は、次のような別の対照表を提案している (308 とそれに続く説明を見よ。Sasson は音訳を載せているが、ここでは、ヘブライ文字で記している)。

10 節	11 節
a. אַתָּה חֲסַתְּ עַל־הַקִּיקִיּוֹן	a'. וְאֲנִי לֹא אַחֹס עַל־יַנְיָהּ הַעִיר הַגְּדוֹלָהּ
b. אֲשֶׁר לֹא־עָמַלְתָּ בּוֹ וְלֹא גִדַּלְתּוֹ	b'. אֲשֶׁר יֵשְׁבָה הַרְבֵּה מִשְׁתִּים־עֲשָׂרָה רְבוּ אָדָם
c. שְׁבוּן־לַיְלָה הִיָּה וּבּוֹן־לַיְלָה אָבָד	c'. אֲשֶׁר לֹא־יָדַע בֵּין־יָמֵינוּ לְשִׁמְאוֹ
	d. וּבְהֵמָה רֶבָה

この表によれば、b. と b'、c. と c' は対比されていることになっているが、それはむしろ、記述の区切りから考えたものに思われ、内容からすると、対比となっているとは言えないように感じられる。

a. 行では、ヨナとヤハウエの「あわれみ」が対照されている。動詞は同じ語根 וּנַח ¹⁶ が同じ語幹で用いられており、対象が前置詞 לְ に導かれている点も共通している。一方、ヨナに対して二人称男性単数の独立代名詞を使い、ヤハウエは自らを一人称共通単数の独立代名詞で表しており、対比が際立たされている。

b. 行では、a. 行における対象への関与が言及されるが、11 節にはそれがない。c. 行は、a. 行における対象が存在した期間が言及されるが、これも、11 節にはない¹⁷。一方、d. 行では、a. 行における対象の描写であるが、これに対応するものは 10 節にはない。また、b. 行、c. 行での記述が比較的短いのに対し、d. 行での記述はかなり長くなっている。数においても、c. 行では「一夜」が強調されているのに対し、d. 行では「12 万」という数が強調されている。

このように、ヤハウエがヨナの「あわれみ」と自分の「あわれみ」とを比較する場合、その対比は、むしろ、自分の対象とするものの記述が長く、その数の多さを強調するものになっている。

10 節、11 節に用いられている動詞 וּנַח は、ヘブライ語聖書中に全 24 回現れる¹⁸。そのうち、否定詞と共に用いられているのが 19 回（否定詞がないのは、下記の 3 つと、ヨナ 4：10、詩 72：13）と、圧倒的に多い。神的存在が主体となるのは 11 回で（エレ 13：14、エゼ 5：11、7：4、7：9、8：18、9：10、20：17、24：14、ヨエ 2：17、ヨナ 4：11、ネヘ 13：22）、うち否定詞なしで用いられるのは 3 回である（エゼ 20：17、ヨエ 2：17、ネヘ 13：22）。これらのうち、エゼ 20：17 以外は祈願である。都市が対象となっているのはエゼ 16：5 とヨナ 4：11 のみ、人間以外が対象となっているのは創 45：20 とヨナ 4：10 のみである。

このような用法の分析から、この動作の主体は、神的存在であれ、人間であれ、通常、「あわれみ」をかけないか、「あわれみ」をかけないことが求められているということが明らかとなる¹⁹。そのような前提があるからこそ、ヨエル書の祭司やネヘミヤは「あわれみ」を求めるのだと考えられる。だとすると、問題となっているヨナ 4：11 は否定文として読んでも差し支えないことになり、これを修辞疑問として読むためには、語釈以上の解釈、もっと言えば、「ヤハウエはあわれみ深い」という神学的前提が必要ということになる。

11 節を否定文として読んだ場合、10 節との対比は成立するのだろうか。修辞疑問

16 この語の意味については、Sasson：309-10、Trible：207、Fretheim：184-5、Simon：44-5 参照。

17 Simon は、11 節で、本論では空欄になっている部分に、10 節の内容に対応する文言を挿入している(45)。

18 ヨナ書の他には、創 45：20、申 7：16、13：9、19：13、21、25：12、サム上 24：11、イザ 13：18、エレ 13：14、21：7、エゼ 5：11、7：4、9、8：18、9：5、10、16：5、20：17、24：14、ヨエ 2：17、詩 72：13、ネヘ 13：22。西村：127-8 参照。

19 Price & Nida：114。

として読んだ場合は、A の行為 B が A' の行為 B' の「類比」となっており、

$$A < A' \quad \therefore \quad B < B'$$

という論理となっていた。「ヨナよりも偉大な存在であるヤハウエは、ヨナがあわれんでいるとうごまの木よりも大いなる存在であるニネベをあわれむ」のである。

しかし、否定文で読んだ場合、「ヨナはとうごまの木をあわれんでいる。しかし、ヤハウエはニネベをあわれまない」となり、別の論理が成立している。「ヨナよりも偉大な存在であるヤハウエは、ヨナがあわれんでいるとうごまの木よりも大いなる存在であるニネベをあわれまない」と考えることも可能である。

11 節を修辞疑問ととるか、否定文ととるかという 2 つの読みについて、最終的に確定することは難しい。しかし、外見上この文が疑問であることを示すものはないことは確認しておきたい。この文を修辞疑問として読むか、否定文として読むかは、読者の解釈によっているということである。言い換えるなら、この文をどのように訳し、解釈するかは、読者のヤハウエに対する神学的理解、あるいは、期待によるのだ。

3 ヨナの語るヤハウエ

では、ヤハウエは、ヨナ書のもう一人の重要なキャラクターであるヨナによって、どのように語られているのだろうか。

a) 「いつくしみとあわれみの神」

ヨナは、自らの神認識を、ヘブライ語聖書においてよく知られている古典的な定型句で表現する (4:2)。

כִּי יִדְעַתִּי כִּי אַתָּה אֱלֹהֵינוּ וְנַחֵם אֶרְךְּ אַפַּיִם וְרַב־חַסֵּד

というのも、私は知っていたからです。あなたがいつくしみとあわれみの神であり、怒るのは遅く、恵み多い方であることを。

しかし、これは、引用されている定型句の半分でしかない。出 34:6~7 は次のように記している²⁰。

20 この定型句が用いられる箇所は、他に、民 14:18、ヨエ 2:13、詩 86:5、15、ネヘ 9:17、31 など。Sasson はこれらを比較して、ヨエ 2:14 との類似を明らかにしている (280-2)。鈴木: 673 注二。

יְהוָה יְהוָה אֱלֹהֵי רַחוּם וְחַנּוּן אֲרֹךְ אַפַּיִם וְרַב־חַסֵּד וְאֱמֶת
נִצַּר חֶסֶד לְאֱלֹפַיִם נִשְׂא עֵז וּפִשַׁע וְחִטָּאָה וְנִקְהָ לֹא יִנְקָה
פִּקְדַּי עֵז אֲבוֹת עַל־בָּנִים וְעַל־בָּנֵי בָנִים עַל־שְׁלִשִׁים וְעַל־רַבָּעִים

ヤハウェ、ヤハウェ、いつくしみとあわれみの神であり、怒るのは遅く、恵みと誠実さは多く、
恵みを数千代にもわたって守り、過ちと背きと罪をゆるす（上げる）者、
罰すべき者を必ず罰し、父たちの過ちをその子どもらに、子どもらの子どもらに、3代にも、4代にも、報いる者。

両者を比較すると、ヤハウェの名が省かれているが、これは、直接会話しているからだと考えられる。また、**חַנּוּן** と **רַחוּם** が入れ替わっているが、内容的に問題はないだろう。そして、出 34 からの定型句にある **וְאֱמֶת** 以下がすべて省略されている。これは、これ以降の文言に対してヨナが疑問を持っていたからなのか、それとも、ここまで引用すれば、最後まで思い浮かべられるだろうと考えられたからなのか、決定することはできない。

定型句の後半を省いたヨナであるが、「悪を思い直す (וְנִחַם עַל־הַרְעָה)」という一文を付け加えている。これは言うまでもなく、3:10 の表現をそのまま引いてきたものである。ヨナの中では、ヤハウェが「悪を思い直した」ことは、古典的な神告白の延長線上でとらえられているということである。しかし、先に見たように、これはヨナにとって「悪」である。「いつくしみとあわれみの神」と言いながらすぐに自分の死を願うことは（3節）大きな矛盾と感じられる²¹が、「いつくしみとあわれみの神」が「悪を思い直す」ことを快く思わない者にとっては、それは、自然な思いなのだろうか。

二ネベへの「悪を思い直し」（3:10）、二ネベを「あわれむ」（4:11）という表現は、ヤハウェに関する定型句で言われている「いつくしみとあわれみの神」と関連するとする研究が存在する²²。直感的に、この関連が、ヨナ書の3章と4章を繋いでいると思われる。しかし、Trible は動詞 **חוס** と動詞 **נחם** の違いを論じている（207）。

Trible は、ヤハウェが「悪を思い直した (נחם)」のは二ネベの人々が「悔い改めた」からだとし、二ネベを「あわれむ (חוס)」のは、これとは異なり、ヤハウェの主権と自由に基づくもののだとしている。従って、「あわれみ」は不安定で移り気なものであると、Trible は考えている（208）。

21 Sasson は、ヘブライ語聖書（続編含む）において登場人物が死を願う場面を引用して、ヨナの心情を理解しようとしている（283-6）。

22 Wolff は **רַחוּם** の動詞 **רחם** と動詞 **חוס** がほぼ同義であることを論じ（173）、Simon は動詞 **חוס** と動詞 **חמל** が同義であることを論じている（44）。

Trible は「悔い改め」と「悪を思い直した」ことを結びつけて考えているが、先にも述べたように、ニネベの人々の「悔い改め」は内面的なものというより、儀式的・外形的なものであった。これをヤハウェが受け入れることができたのは、ヤハウェの側でも、ニネベの「悪」に対する認識が曖昧なものだったからであった。従って、この二つの結びつきは、「あわれみ」や「いつくしみ」とは無関係な、ある種機械的なものだと言えるかもしれない。この点で、ヨナの理解と批判は当たっていない可能性がある。このような「悔い改め」と「悪を思い直した」ことの間をふまれば、Trible が言うように、「あわれむ」は「悔い改め」と無関係であると考えられる。

さらに、ヤハウェの「不安定さ」と「移り気」が、3 章や 4 章の物語と 1 章の物語を比較すると、浮かび上がってくる。

ヤハウェの送った大風によって海は荒れ、船は漕ぎ悩む (1:4)。このヤハウェの行為が「逃亡」するヨナと関連があるのか、本文はどちらにも読めるような表現であったが、荒天に恐れた乗員たちは「それぞれの神に祈る」(5 節)。しかし、この祈りをヤハウェは聞かない。もちろん、自分に対する祈りが含まれていなかったのかもしれない。ヨナは船底で眠っていて、この祈りには加わっておらず、乗員たちがはつきりとヤハウェに向かって祈るのは、14 節になってからである。しかし、ニネベの人たちが「神を信じた」と記されるとき、それは、定冠詞を伴わない אֱלֹהִים であった (3:5)。違いは、ヨナが審判を告知したことだが、その際に、ヤハウェの名を使ったかどうかは明らかではない。本文に記されているヨナの告知は、ニネベを主語にしたものであった (3:4)。従って、この「神を信じた」という表現も、一般的な倫理を指しているとも読める。従って、ヤハウェがその行為や祈りを受け入れるかどうかは、ヤハウェの自由な判断にかかっていると言うことができる²³。

また、ニネベの人たちの外形的な「悔い改め」によって「悪を思い直した」のに対し、大風と荒天を静めるのには、ヨナを海に投げ込むという具体的な行為が必要であった (1:15)。簡潔な記述からは、この 2 つの因果関係をはつきりと見て取ることができる。一方は「悔い改め」の外形によってこれから下そうとしていた「悪を思い直した」のに対し、もう一方は真摯な祈り (1:14) と人身御供によってヤハウェの送った風と荒天が静まったのである。何がヤハウェの対応を分けたのかは、読者には明らかにされていない。

ヨナが引用した定型句に表されている神観、「いつくしみとあわれみの神であり、怒るのは遅く、恵み多い」を突き詰めれば、どのように「いつくしみとあわれみ」を下し、どのような場合に「怒り」、どのように「恵み」を与えるのかは、まったく予

23 Trible は、この 2 つの例から見られる矛盾を上げ、神が「信頼できず」、「予見できない」としている (204)。

「いくつしみとあわれみの神」

見できないことになる。その「自由」は、最初「悪」と認識したニネベさえ「あわれみ」、あるいは、「あわれまない」ことも可能にする。そうだとすれば、Tribleの言うように、ヤハウェは「不安定で移り気」であると映る。

b) 「海と乾いた地を造った神」

ヨナが語った、ヤハウェについてのもう一つのことば（1：9）は、ヘブライ語聖書が語る、創造神としてのヤハウェにかかわるものであるが、表現は独自であると言っていいだろう²⁴。

וְאֵת־יְהוָה אֱלֹהֵי הַשָּׁמַיִם אֲנִי יָרֵא אֲשֶׁר־עָשָׂה אֶת־הַיָּם וְאֶת־הַיַּבֵּשָׁה

天の神²⁵ ヤハウェを私は恐れる。この神は、海と乾いた地²⁶を造った。

このことばは、ヤハウェが海も乾いた地も支配していることを表していると考えられる。確かに、この物語において、ヤハウェは、大風や海（1：4）、魚（2：1、11）、とうごまの木（4：6）、虫（4：7）、東風（4：8）など、天地の万象を自在に用いている。しかも、それらはヨナに関わり、ヨナがヤハウェの命令を理解し、これに従うためにだけに用いられている。もちろん、これらの自然物・現象はヤハウェの命に背くことなく従い、ヤハウェの命に従わなかったり、ヤハウェと論争したりするヨナとの対比となっている。

ヤハウェが天地万物を創造し、従って、それらを意のままに操ることができることを認めるとしても、それが、一人の人物が自分の命令に従うようにすることが目的であるとしたら、その行為は受け入れられるのか。これもまた、ヤハウェの「いくつしみとあわれみ」と同じように、古典的な神告白を極端に突き詰めた場合に起きる、問いであろう。

ここまで見てきたように、ヨナ書は、ヘブライ語聖書に共通して見られる2つの神認識を、ヨナに語らせることによって、そして、物語においては極端な形で提示することによって、神学的な議論を読者に促しているということができよう。

24 このことばの独自性については、Sasson：119。「乾いた地」については創1：9、10に言及がある。Wolfによれば、海への言及がある点で、詩95：5がヨナ書の表現に近いと言う（116）。

25 「天の神（אֱלֹהֵי הַשָּׁמַיִם）」はエズ、ネヘ、ダニに19回用いられており、そのうち、12回はアラム語 אֱלֹהֵי שָׁמַיָא で記されている。Wolf：115、西村：35。

26 Simonは、ここで אֶרֶץ でなく יַבֵּשָׁה が用いられるのは、海との対比を際立たせるためであろうとしている（12）。西村：36参照。物語においては、この後、「乾いた地」が用いられる（1：13、2：11）。一方、יַבֵּשָׁה と יָם が共に用いられていることは、「葦の海」の出来事を想い起こさせる（出14：16、22、29、15：1）。

おわりに

ヨナ書は、ヤハウエとヨナの関係、ヤハウエとニネベの人々の関係、ヤハウエが自然物・現象を用いるそのやり方を描いて、ヤハウエのキャラクターについての問いを突きつけている。もちろんそれは誇張されたものであるが²⁷、この神、正確には、この神について、ヘブライ語聖書が告白し、主張している定型句や中心となっているとされる神認識がもつ危険性を明らかにしていると言えるだろう²⁸。

このヤハウエは、まったく自由に「いつくしみとあわれみ」を施すが、それは、異邦人、それも、ニネベという、イスラエルにとっては憎むべき町にさえ与えられる。このヤハウエは、「海と乾いた地の造り主」として、あらゆる自然に対して支配権を持ち、それらを意のままに操ることができるが、それを、一人の人間に自らの意思を伝えるということだけのために用いることができる。これらは、慣れ親しんだ神告白を、極端に論理的に突き詰めたことから起きてくる。

ヤハウエは、極端に振る舞うこともできるのだ。では、このように極端な行動をするヤハウエと、ヘブライ語聖書の他の箇所では表されている神のあり方とどのように調和させることができるのか。とくに、諸外国に対する審判とイスラエルの救済を告知する「12人」の中で、どのように読まれうるのか。ヨナの物語は、読者に対して、その神認識を、定型句による神告白をとらえ直し、その意味を考えるよう、促しているのである。

参考文献

A. ヴァイザー

1982 「ヨナ書」(鈴木皇訳)、『十二小預言書 上』(ATD 旧約聖書註解(25))(秋田稔他訳)、ATD・NTD 聖書註解刊行会、429～456頁 (*Das Buch der zwölf Kleinen Propheten I: Die Propheten Hosea, Joel, Amos, Obadja, Jona, Micha, Das Alte Testament Deutsch*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 19797)

鈴木佳秀

2005 「ヨナ書」、旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書Ⅲ 預言書 イザヤ書 エレミヤ書 エキエル書 十二小預言書』、岩波書店、665～673頁

27 Fretheim は、この誇張によってヨナ書の神学的主張が明らかにされていると述べている。それは、ヨナ書に記されているような形で、神が自然を無視し、人間を蔑ろにして、イスラエルを救うことを期待するべきではないということだと、Fretheim は考えている (171-3)。

28 Trible は、定型句やステレオタイプな考えを“the dominant testimonies”、これとは矛盾する表現や考えを“the countertestimonies”と名付け (201)、そして、この二つがヨナ書に同時に現れることを認める必要があるとする (208)。

「いくつしみとあわれみの神」

西村俊昭

1975 『ヨナ書注解』、日本基督教団出版局

Terence E. Fretheim

2013 *Reading Hosea-Micah: A Literary and Theological Commentary*. Macon, GA: Smyth & Helwys.

Jack M. Sasson

1990 *Jonah: A New Translation with Introduction, Commentary, and Interpretation*. The Anchor Yale Bible 24B. New Haven: Yale University Press.

Uriel Simon

1999 *Jonah. The JPS Bible Commentary*. Philadelphia: The Jewish Publication Society.

Phyllis Trible

1998 “Divine Incongruities in the Book of Jonah,” pp. 198-208 in *God in the Fray: A Tribute to Walter Brueggemann* (edited by Tod Linafelt and Timothy K. Beal). Minneapolis: Fortress Press.

W. Dennis Tucker, Jr.

2006 *Jonah: A Handbook on the Hebrew Text. Baylor Handbook on the Hebrew Bible Series*. Waco, TX: Baylor University Press.

Hans Walter Wolff

1986 *Obadiah and Jonah: A Commentary* (translated by Margaret Kohl). Minneapolis: Augsburg Publishing House. (*Obadja und Jona, Biblischer Kommentar*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins, 1977)

Meir Zlotowotz

1980 *Jonah: A New Translation with a Commentary Anthologized from Talmudic, Midrashic, and Rabbinic Sources, Second Edition. The ArtScroll Tanach Series*. Brooklyn, NY: Mesorah Publications